

1. 出題の意図

課題文は、ジャック・アタリ著／林昌宏訳『食の歴史』（プレジデント社、2020年）の一部を引用して改変したものである。本書は、太古の時代から現代までの食をめぐる人類の歴史について、主として欧米諸国の食文化と食産業の変容過程に注目して論じ、現代の食と人間活動に関わる社会課題や予測される未来への警鐘の書となっている。

本書の構成は、「1章 さまよい歩きながら暮らす」「2章 自然を食らうために自然を手なずける」「3章 ヨーロッパの食文化の誕生と栄光」「4章 フランスの食の栄光と飢饉」「5章 超高級ホテルの美食術と加工食品（19世紀）」「6章 食産業を支える栄養学（20世紀）」「7章 富裕層、貧困層、世界の飢餓（現在）」「8章 昆虫、ロボット、人間（30年後の世界）」「9章 監視された沈黙のなかでの個食」「10章 食べることは重要なのか」「付属文書 食の科学的な基礎知識」となっている。

本書の特徴は、「食は歴史の中核に位置する重要な人間活動」（同書 p.20）という問題意識の下で、食をめぐる健康問題から環境問題など、広範な社会課題と社会そのもののあり方に考察が及んでいる点にある。

課題文の引用箇所は、「9章 監視された沈黙のなかでの個食」の一部である。この章は、本書全体の問題意識と内容を集約した章とも考えられ、節の構成は「料理するのをやめる」「ノマドの粉末食」「個食に向けて」「沈黙の監視型社会」「それでも不安は解消されず、最悪の事態を迎える」となっている（課題文中では省略）。食事というごく日常の行為が、必ずしも主体的に選択されているわけではなく、社会的につくられた範囲における「自由な食生活」となっていることを認識する必要があることに改めて気づかされる章である。

2020年以降に発生した新型コロナウイルス感染症の拡大の下における食生活は、会食による会話が困難な状況におかれている。その中で、食事というごく日常的な人間活動を通じて、社会的な問題とその改善へ向けた行動の意義について改めて考えてみたいというのが本書を取り上げた意図である。

2. 評価のポイント

問1

問1の記述問題では、「課題文の記述を踏まえて」の説明が求められる。筆者が主張する、現在の我々の食のあり方が「太古の時代」に「逆戻りした」状態が何か、正確に把握できたかが問われた。課題文の下線部直後の「すなわち」ではじまる文章から、「独りで立ったまま」「時間と場所に関係なく」「持ち運びしやすい食物」を食べるのが現代と太古で共通することが分かる。また、その直前の段落にも前提条件などが挙げられている。これらのキーワードを引用して説明する文章になっていることがカギとなる。

問2

ここでも「課題文の記述を踏まえて」の説明が求められたが、「個食化が進行」し、その結果として「社会で深刻化する問題」はどのようなものを指摘できているか否かがポイントである。個食化の進行によって生じた社会問題を説明する内容は課題文の下線部直前の「懇親、意見交換、共通の認識の形成」だけでなく、「合意の形成にとって最適な場の消滅」など、本文全体で複数箇所が該当するように思われる。それらを用いて社会的な問題にまで言及することが求められる。

問3

問3は、読解および論述問題である。筆者が述べている「われわれは沈黙の監視型社会で暮らすことになるだろう」という点に関して、前半では、「沈黙の監視型社会」について、本文で説明されている「超監視型社会」や「自己監視型社会」の特徴も読み取った上でまとめることがポイントになる。

後半では、前半でまとめた内容に関連して、筆者の主張に対する自身の考えについて、知識、経験、体験にもとづいて的確に論旨を展開することになる。とくに、「食生活」、「食糧生産の方式」、「議論の形態を見直す」ことなどに関連した記述がポイントになる。

3. 採点講評

問1

限られた文字数ながら、課題文の記述を十分踏まえた解答となっているかが重要である。下線部の前後から、太古の時代と現代の食習慣を比較し、似通っている点を列挙すればよい。全体として、文字数は満たしていたが、本文中の抜き書きであるにもかかわらず誤字がやや目立った。「食事の時間がない」ことに十分ふれられていた一方、太古の時代と現代を対比して説明しきれていない解答が目立った。主語がないため、いつのことを指しているのか分かりにくかったり、文の整合性がなかったりしたため、部分点にとどまったケースもあった。

問2

個食化の進行により、生じた社会問題にはどのようなものがあるか、説得力をもって示すことがポイントである。解答を見ると、前半にあたる食事についての状況説明に字数を多く割いてしまい、後半の社会問題の記述に踏み込めていないケースが目立った。個食化が進むことで、深刻化する社会的な問題や社会課題を指摘してほしかった。また、課題文を抜き出して用いる際、要約したために意味が変わってしまい、文のつながりや意味が通じなくなってしまう解答が少なくなかった。

問3

前半の解答として、「監視型社会」、「超監視型社会」、「自己監視型社会」の内容を簡潔に整理した上で、「沈黙の監視型社会」について、話し相手をもたない、会食の機会を失う、長寿の対価、あらゆることが禁じられる、などの点に注目してまとめることになる。

解答例として、「超監視型社会」や「自己監視型社会」の説明が欠落している例や、「沈黙の監視型社会」の内容説明が部分的な指摘にとどまっている例がみられた。

後半の解答として、家族との食事（一家団らん、食卓）、地域住民との会食（寄合い、子ども食堂）、食と農の関係（食育、食農体験学習）、食品摂取の問題（食品添加物、完全食）などを具体的に取り上げることになる。その上で、筆者のいう「沈黙の監視型社会」に対する否定的な考えとして、健康で文化的な人間らしい食生活を取り戻す社会の再構築が必要である点や、慎重な考えとして、すべての人が食事での会話や会食の場を選択しないとは限らない点、また一部肯定的な考えとして、個々人の嗜好に合わせた食生活を送ることができ長寿社会でよい点、などについて述べることになる。

解答例として、事例が複数列記されているが、全体としての論点が示されていない例や、課題文をほぼそのまま引用した説明や表現にとどまり、自身の知識や経験などにもとづいて考えが十分に述べられていない例などがみられた。また、本書のタイトルであり課題文のテーマにもなっている食にまつわる食生活、食習慣、食事、食餌、食品、食料・食糧生産、会食と、監視型社会に関連した記述になっていない例もみられた。